The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	谷崎潤一郎『細雪』論 ： 「家」の視点から
Author(s)	大西, 萌木
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 34-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79343
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

谷崎潤一郎『細雪』論

―「家」の視点から―

日本文学　博士前期課程２年
大西　萌木

はじめに

谷崎潤一郎が執筆した『細雪』は、没落した大阪の旧家を舞台に、四姉妹の見合いや恋愛を中心とした悲喜こもごもの日常を描いた長編小説である。谷崎の代表作であるだけでなく、日本近代文学史に残る傑作であると言えるだろう。本作に関する近年の研究としては、焦点化される人物の視点を相対化した上で、「語られ方」と「書かれたもの」の関係を考察するものがある。本発表ではこれらの先行論を踏まえ、『細雪』を「家」の観点から論じる。『細雪』が蒔岡家という旧家を中心とした物語であることは先に述べたが、蒔岡家における「家」の構造や登場人物の「家」にまつわる意識などが物語の展開に大きく関与していると発表者は考えている。今回は物語の大半で焦点化される次女の幸子に注目し、彼女の「家」への意識を中心に見ていきたい。

1、先行論の整理と問題の所在

『細雪』に関する先行論は大きく２つの潮流、①書かれ方について、②内容について、に分けることができる。①に関して、『細雪』は物語の大半が幸子に焦点化した語りから成り、『細雪』の特徴の一つとして同時代評でも度々言及されてきた。佐藤は①と②を合わせる形で、書かれ方と書かれた内容の双方を関連させて論じた点で革新的であったと言える。

> 幸子の生活文化の情景は、語り手の第三者的視点からの描写を許すような客観的情景ではない。上十九に描かれているのが単なる「平安神宮の桜」ではなく、幸子たちに即した平安神宮の桜であるように、それは定期的な様式のくり返しを実践する幸子によってはじめて見出されうる情景なのである。そして、そのような情景の中にこそ、「生活の定式」の姿が正しく現出するのである。（中略）このため、幸子の年中行事や「生活の定式」に価値を見出そうとする美意識は、一方で作中の出来事を価値づけ判断する枠組として機能しながら、他方では作中の出来事によって相対化を迫られることにもなる。[1]

佐藤は幸子の認識が蒔岡家の「生活の定式」を描くことに寄与していると述べ、幸子の認

---

[1] 佐藤淳一「生活の定式」と美意識―谷崎潤一郎『細雪』の表現形式の分析から」『国語と国文学』81 巻 7 月号、2004 年 7 月

識の相対化が可能であることを明らかにした。それ以降の研究はこの佐藤の論を踏まえた上で展開していく。その流れの中で「家」という枠組みに注目した先行論としては、以下の吉田の論が挙げられる。

> 『細雪』は船場の元商家という特殊な家族を舞台にすることで、戦中期は〈結婚〉という切り口を利用して、「家」のアイデンティティを規定する伝統的な価値観からの逸脱と、その逸脱に対する無自覚さゆえに、新たな価値観を獲得できない雪子の姿を描いていた。だが戦後期に入ると、作家は「家」のアイデンティティの再生・創出という課題をいち早く捉え、伝統を内面化したように振る舞うことで、自分の立ち位置を確立しようとする雪子の姿を新たに描き出したのである。(中略)「事件」を求める幸せな心ゆえに、「家」をめぐる雪子の動きに気づかない幸子と、船場の店舗を失った後の「家」の価値観と秩序を創出できない雪子のコントラストによって、『細雪』は新たな「家」の秩序を組み上げていく社会がこれから直面するはずの困難を先取りするかのように描いた。

吉田は「家」に関する幸子と雪子のコントラストを明らかにし、「家のアイデンティティ」という主題を主張している。しかしその論において当時の民法改正の影響を前提としており、『細雪』内での「家」にまつわる諸問題については本文のより詳細な分析が必要である。

2、差別化される妙子と幸子の「家」観

幸子には姉の鶴子、妹の雪子と妙子がいるが、幸子にとって彼女たちは等しく並べられる存在ではない。特に末妹の妙子は、「末つ子に生れて一番不仕合せに育つたせゐか、自分達の誰よりも世故に長けてゐて」(中巻七章)、「妙子は前に一度事件を起こしたことがあり、自分や雪子とはちよつと心臓の搏ち方の違つたところがある妹なので」(中巻二十章)など、しばしば差別化される存在である。我々は、これがあくまで幸子による妙子評であることに注意しなければならない。では、なぜ幸子はこのように妙子を差別化しようとするのか。発表者は、この問題に幸子の「家」観が大きく関わっていると考えている。

まず、幸子にとっての姉妹と「蒔岡家」との関連について、本文に基づいて考察する。「妙子はその時分も舞を習はせられてゐて、正月にはよく母や姉の三味線で、此の「萬歳」を舞つたものなので」(上巻十五章)、「幸子は此の妹が、小娘の時から老せたことを云ふ癖があるのを知つてゐたが」(中巻三十二章)など、幸子の姉妹への目線はしばしば彼女らが幼かったころに向けられる。幸子たちの幼少時代は、すなわち蒔岡家の最盛期でもある。たとえば次の引用部では、「蒔岡家」という言葉が直接登場する。

> なんぼこいさんが過去に過ちを犯したからと云つて、それほどまでに誇を捨てゝ自暴自棄になるには及ばないではないか。痩せても枯れても、こいさんも蒔岡家の娘ではないか。(中巻十八章)

鶴子が妙子(「こいさん」)の不祥事に際し妹のことを「身内」と呼ぶのに対し、幸子は妙子を「蒔岡家の娘」と言う。ここで重要なのは、「娘」という言葉である。「蒔岡家の娘」と

いう言い方は、「蒔岡家の父母」が頭にあってこそ使われるはずだからだ。幸子の価値観の基準として、父母がいた頃の全盛期の「蒔岡家」が、目の前の没落した「蒔岡家」よりも影響力が大きいと言える。ここで少し戻って、妙子の差別化について考えてみたい。中巻二十四章には次のような記述がある。

> だが一方から考へると、妙子が四人の姉妹達の中で一人さう云ふ変わり種になつたことについては、尤もな理由もあるので、当人を責めるのは無理なところもないではなかつた。なぜかと云つて、四人のうちで末つ児の彼女だけは、亡き父親の全盛時代の恩恵を、十分には受けてゐないのであつた。

幸子は妙子が「変わり種」になった原因として、蒔岡家の経済力の低下を挙げている。しかしこの部分は妙子の性質の変化について幸子が嫌悪感を抱いた後に挿入された記述であることを考えると、この妙子への視点は、幸子自身に左右されるものであることに注意しておく必要がある。そして妙子への距離を感じる理由として、幸子は全盛期の蒔岡家の恩恵を受けていないこと、すなわち父母との時間を共有していないことを挙げている。父母のいた「蒔岡家」と幸子自身の心情が、本文に表れる妙子への評価に影響を及ぼしている。

3、幸子から見た「蒔岡家」と母親

在りし日の「蒔岡家」を考える際、財力を持っていた父親に焦点が当たることが多いが、本発表では母親の影響について考えたい。姉妹の母親について、本文では「明治の女であるから、背も五尺に満たないくらゐであつたし、手や足なども可愛く、かぼそくて、指の形の華奢で優雅だつたことは、精巧な細工物のやうであつた」（下巻八章）と説明されている。そのような半ば神格化された母親像は、姉妹に対する幸子の眼差しに透けて見える。例として、妙子が赤痢になった時の幸子の語りを以下に挙げる。

> 病人の体には或る種の不潔な感じがあつた。（中略）いつたい妙子ぐらゐの年齢の女が長の患ひで寝付いたりすると、十三四の少女のやうに可憐に小さく縮まつて、時には清浄な、神々しいやうな姿にさへなるものだけれども、妙子は反対に、いつもの若々しさを失つて実際の歳を剥き出しに、――と云ふよりも、実際以上に老けてしまつてゐた。（下巻二十章）

このとき、幸子の頭には母親が亡くなった時の姿があったと思われる。そのときの心情について回想したと思われる記述を次に引用する。

> さう云ふ中で白露が消えるやうに死んで行く母の、いかにもしづかな、雑念のない顔を見ると、恐いことも忘れられて、すうつとした、洗ひ清められたやうな感情に惹き入れられた。それは悲しみには違ひなかつたが、一つの美しいものが地上から去つて行くのを惜しむやうな、云はゞ個人的関係を離れた、一方に音楽的な快さを伴ふ悲しみであつた。（下巻八章）

幸子にとって、「清潔さ」「神々しさ」が母の特徴であり、「若さ」は姉妹に共通するものであると言える。だからこそ病床の妙子に心理的な距離を感じたとき、妙子の「不潔さ」「老

化」が書かれるのである。

母親の記憶を共有できているか否かによって、幸子にとってその人物がどの程度「蒔岡家」の中心に近いかが決められていく。たとえば辰雄は「義兄の辰雄は母と云ふ人を全然知らないのであるから、何の感じも湧く筈はないが」（下巻八章）という突き放したような物言いからも分かるように、思い出を共有しない人物として「蒔岡」の枠外に出されてしまう。そしてその意味では、「蒔岡」の全盛期や母の記憶を持たない妙子も、幸子にとって距離がある存在である。だからこそ幸子は妙子を他の姉妹と区別し、妙子の特徴を蒔岡の没落と結びつけるのである。

一方で、幸子は雪子を「此の妹が四人の姉妹たちのうちで誰よりも母の面影を伝えてゐる」（下巻八章）人物として重要視する。だからこそ、雪子にシミができただけで、幸子はひどく動揺してしまう。

> ……だが一つ確かなことは、もう此れからは今迄のやうな優越的態度を以て「見合ひ」することは出来ないのであつた。……恐らくは此の次の機会にも、昨日のやうにビクビクしながら相手の凝視に妹を晒さなければならないのであつた。（下巻七章）

雪子にシミが浮き出てきたことにより、幸子はそれを隠そうと画策する。本文を読む限り、実際に他者の目に見える形でシミが現れていることは確かだろうが、それがどれほど見合いに支障をきたすものであったのかは疑わしい。先行論ではシミが雪子の処女性や蒔岡家の衰退の象徴として読まれてきたが、ここでは幸子がシミを過大に重要視してしまう点に注目すべきであろう。幸子にとって雪子は最も母親に似た「蒔岡家」の化身のような存在だった。そのため、幸子の中でその偶像に欠点ができることは、彼女の中の「蒔岡家」の地位が社会的に低くなってしまうことと同義なのである。

このようにして幸子は、父母との関りや類似性を軸として自分なりの「蒔岡家」を構築していく。その過程で、「蒔岡家」にふさわしくない行動をとる妙子は蒔岡家の没落と結びつけて語られ、理想的な「蒔岡家」から排除される。その一方雪子が母の代わりとして「蒔岡家」の象徴に祭り上げられ、ささいなシミまでもが問題とされていく。重要なのは、作品がこうした幸子による「蒔岡家」構築の過程を露にしている点である。『細雪』は蒔岡家の四姉妹の日常を描いた作品だと捉えられてきたが、その「家」は確固としたものではなく、登場人物の認識の中から作り出されていく構築物なのである。

おわりに

本発表では『細雪』の読み直しを図るため、幸子に焦点化した語りと物語の内容との関連に着目し、「家」という視点から本文を分析した。書かれ方と内容が相互に関連している様を明らかにし、その上で人物像の言動から「家」という大きな枠組みを読み取るという本発表の試みは、『細雪』の解釈のみにとどまらず、谷崎の他作品や、「家」を扱った日本近代文学全般に関する研究に新たな視座を与えることが可能となるだろう。